キャリアアップ

高齢者も障がい者も、共存できる社会をめざす元営業マン

仲村貴之さん／46歳

障がい者支援施設たいようの里 施設長

キャリア

24歳頃	大手自動車販売会社の営業マンとして働く
25歳頃	会社を辞め介護福祉士になる勉強を始める
27歳頃	介護サービスに転職し新施設の開設にたずさわる
42歳頃	施設長となる
46歳頃	介護施設を退職し、障がい者施設の施設長となる

ある日の1日

POINT

- ○新人営業マン時代に転機、福祉の世界へ飛び込む
- ○高齢者も障がい者もノーマライゼーションの世界では同じ人たち
- ○メンバー間の情報共有で利用者さんが満足する状態を後任にバトンタッチ

Q 福祉の仕事を始める前は何をしていた？

── 新人営業マンとして自動車販売を担当

大学を卒業して大手自動車メーカーの販売会社の営業マンになりました。私の担当エリアは高齢者が多くて、車は趣味でしか乗らないような人が多かったのですが、何度も通ううちに自分が孫のように思えてくるのか、買い替えなくてもいい車を買ってくれたりしたのです。

そんな折、顧客の老夫婦が、「あなたは営業に向いてないから」と言って、ある方と引合わせてくれました。それが、なんとヘルパーさんでした。そのヘルパーさんによると、近く介護保険が始まり、これからの社会に必要とされる制度で、国家資格も取れて将来の仕事にもなるということでした。今思うと、ヘルパーさんを引き合わせてくれたあの老夫婦は大恩人です。

── 自分の人生を見つめなおし、一歩踏み出す

実は、恩人がもう一人います。大手自動車メーカーの工場長です。当時、社内で大規模な経営改革が行われ、その結果、ライン作業の方々が大勢リストラに遭いました。その流れで、入社半年の私にも、作業員お二人が部下として配属されました。自分の営業に加え、お二人の責任も負うことになったので、それはもう凄いプレッシャーで必死でした。そんな私を遠くから見ていた工場長から、「他人の人生は背負えないもの。人生を見つめ直してごらん。」と諭され、会社を辞めて一歩進み出してみようと決めました。

こうして営業から福祉に舵を切り替えるのですが、まずは勉強しようと福祉の専門学校に入り、2年後、介護福祉士の資格を取りました。

Q 福祉の仕事をする前と後で、イメージは変わった？

── 福祉に携わり、変わった職業観

福祉へのイメージではなく、職業観が変わったかもしれません。若い頃は、お金を稼いで、裕福に暮らすことが成功だと思っていましたが、そうじゃないな、と思うようになりました。福祉のように、誰かがやらなきゃいけないことを、自分はしないのか？と、よく自問自答します。こんなスタンスで動いているなかで、一緒に動いてくれる人に恵まれてきたのも事実です。

現職には就任したばかりですが、高齢者も障がい者も、ノーマライゼーションの観点では共通ですので、共存できる社会づくりを目指しています。一人では微力なので、いろいろな人を巻き込み、大きな力にしていきたいです。

施設長としては、利用者やスタッフが満足できる状態を維持するため、自分の中だけで物事を完結せずに、後任にバトンタッチできることが最も大切だと考えています。スタッフの思いや考えを整理し、システム化してメンバー間で情報を共有することが大事だと思っています。

Q 仕事以外はどんな生活をしている？

── 息子のサッカーの応援で、充実した休日を過ごす

本田宗一郎など大成した人の話が好きで、本をよく読みます。今は中学生の息子のサッカーの応援にハマっています。今はコロナ禍で集団移動ができないので、試合会場まで送り迎えしています。春日、宗像など遠いところもあり、朝早く出て夕方まで丸一日取られますが、逆にそれが楽しみとなっています。

ハマるタイプなので、いろいろ試して、一旦ハマったらとことん夢中になるほうです。介護施設勤務の頃は、息子のサッカーがきっかけでフットサルを始めました。夜練習があるので教えてもらい、審判の資格も取りました。高校時代はバンドをやっていまして、担当はキーボードでした。妻がTHE YELLOW MONKEYの大ファンで、一緒に遠方までコンサートを聴きに行っていました。コロナが収束したら、また一緒に行きたいですね。

取材を終えて

長年、マネージャーや施設長など、管理職を歴任してこられた仲村さん。施設運営のノウハウをシステム化していく冷静さと、専門職としてご利用者・スタッフを思う情熱の両方を内包されている方でした。